MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

News Letter 中部大学民族資料博物館

vol.08
May 2015

『学園探訪』シリーズ

第４回

人 物 B

民族資料博物館のアドヴァイザーを務めていただいている学園長より、構内の参考作品をめぐって交流を育まれてきた思い出をおうかがいするシリーズです。第四回の今回は「人物B」（図書館２階）についてお話をいただきます。

参考作品：《人物B》　制作　小松義男
油　彩
100×135cm
（中部大学蔵）

小松義男（1904～1999年）。東京生まれ。昭和初期に活動した抽象画家。大学で仏文学を専攻し、美術文学研究のためにフランスに渡ったが、３年間滞在するあいだに、ピカソとの交流で刺激を受け画家の道にすすむ。戦後はモダンアート協会の発起人となり、油彩、水彩、水墨など様々な手法で、具象から抽象まで多様な表現によって絵画制作に取り組んだ。

この作品をみていますと、感覚的な空間世界に遊ぶことができるようで楽しさを感じます。平面の画面に、これまた平面的な図形が組み合わせられているだけなのですが、それぞれの「かたち」が強く、はっきりと、明快に自身の存在を主張し、互いに周囲の「仲間」と強く響き合って、共存しているように感じます。

それはなぜでしょうか。まる、しかく、さんかく、という単純でシンプルな形態に大きく世界を画家が捉えなおしたことで、私たちはこれらの「かたち」をさまざまなものの化身として想像をふくらませて眺めることができるのです。

私にとっては、ここに描かれたかたちは、青い空のもと、建物や樹木が、風や太陽が、大地に抱かれながら生命力をみなぎらせて生きている様にもみえてきます。それは、決して相手を威圧するようなものではなく、それぞれの存在を認識しつつ、切磋琢磨しあいながら自己の主張を高らかに叫び歌い合う、生きているものたちの「生命の賛歌」が胸に響いてくる思いがし、観るたびに豊かな心持ちになります。作者は、戦前の大正デモクラシーの時代に、芸術の都パリでまさに精神の自由を謳歌する芸術に出会い、自分の生き方を決断したのでしょう。そして大きな大戦を２度も乗り越えた後に、再び平和が到来した日を迎え、どれほどの喜びをかみしめていたことでしょう。

私自身も、空襲で焼けた名古屋の町に、戦後十年以上の時を経て、ようやく鉄筋コンクリートの鶴舞校舎が完成した日を、いまでも鮮やかに思い出すことができます。創立者らとともに夢のために走った多くの先輩や仲間とともに、陽光に輝き立つ建物を眺めたときに、自分たちの志を代弁してくれているように思え、誇らしく感じたものでした。生涯、忘れることのできない胸に刻まれた光景の一つといえます。皆さんにとりましても、大切な青春の一場面を、いつになっても生み出すことのできる「今」を慈しみ、過ごしていかれることを願っています。

索引（さくいん）

◇巻頭
『学園探訪』シリーズ　第４回《人物Ｂ》　1
学校法人 中部大学 学園長　大西良三

2014秋季・冬季行事報告

◇特別講座２
10月『古典絵画講座』はじまる　2
民族資料博物館　原田千夏子

◇ 2014 秋季企画展示
10月『春日井キャンパスの 50 年』
民族資料博物館　原田千夏子

◇ 2014 秋季連続講演
『数寄空間の成立と展開について』　3
10月 第一回「“市中の山居”からのメッセージ」
11月 第二回「茶室・数寄屋像の多様性について―近世から近代へ」　4
民族資料博物館　原田千夏子

◇ 2014 部会開催
11月『全国大学博物館学講座協議会西日本部会の開催』　5
民族資料博物館副館長　宇治谷　恵

◇整理資料経過報告（プレス公開）
11月 近藤英明氏のコレクション（仮称）（一部公開）について　6
民族資料博物館副館長　宇治谷　恵
佐藤尚子

◇研究成果発表展示
2月『日本人が残した写真絵葉書に見る
100 年前の東南アジア 付アフリカ』展
国際関係学部教授　青木澄夫

◇トピック
地域グループの利用について　8
～MOVE デッサン会、春日井さくらライオンズクラブ
民族資料博物館　原田千夏子

2015 上半期（春季夏季）行事案内

10月 | 1月

■ 特別講座２

「古典絵画講座」はじまる

‖ 期間 ‖ 2014年10月１日～2015年１月28日　水曜日・午後／全12回 （15名 定員制）
‖ 教室 ‖ 10号館６階　106Ｊゼミ室

指導講師：下川 辰彦（日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員）

後半をむかえ、今年は特に受講生各自の制作の進行にそれぞれの趣向がみえてきた。

一枚の作品にじっくりと取り組む人、小品を複数枚描き、組み合わせて一つの額装におさめるよう仕上がりを総合的なデザインも楽しみながら試みる人、古典絵画の模写に挑戦し、古色の雰囲気を作るために下地に工夫を試みる人など。さまざまな作品のスタイルを自分なりに思考し、またそれに対して指導講師がよりよい方向性を助言することで、さらに興味深い新たな世界へと広がっていき、受講生らの制作に対する関心度が一層高まっている状況をみてとった。各自の強い制作意欲は日々の制作風景から認識できるため、今年度は納得のいく作品完成度に到達するまで待つこととし、年度末の作品発表展示を次年度と合同で行うこととした。（原田）

制作風景

※ なお、本講座受講生の加藤あずささんが、平成26年10月に春日井市の美術協会の公募展に、本講座で勉強したテーマをアレンジし直して出品した作品『ひまわり』が、日本画部門で市長賞を受賞された。

10月 | 12月

■ 2014秋季企画展示

「春日井キャンパスの50年」

‖ 期間 ‖ 2014年10月７日（火）～12月19日（金）
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館 多目的室
‖ 企画 ‖ 和﨑春日、大西良三、下川辰彦、原田千夏子（民族資料博物館）

入場者数：1,932名

秋季企画展示チラシ

大学開学50周年記念の年に合わせて、キャンパスの建物と緑化計画の変遷の様子をたどるテーマを企画し、大学にこれまで記録保管されてきた貴重な資料を各部署より借用し展示をした。

開学当初の工事図面やキャンパス計画図、そして50年にわたって各年代に建てられてきた建物のパース図の数々や、歴代の大学案内パンフレット、年史資料などを展示準備のためにあらためて調査するなかで、展示内容を吟味するために思いのほか時間を費やしたが、各部署の協力を得て実現した。

1Ｆ　エントランス　展示風景

特に、本学のキャンパス計画に長年従事されてきた大西学園長には、企画全体にわたる監修と解説作成に多大なる御協力を賜り、大学の創設期から現在までの過程を一望できる記念碑的な展示内容を紹介することができた。また、展示パネルデザイン等にかかるさまざまな考案については、外部委員の下川先生に御指導を受けながら完成になんとかたどりつくことがかなった。

（次ページへ続く）

多目的室　展示風景

常設展示室　展示風景

展示期間中には、他部署からの広報協力を得たことや、大学全体で開催したさまざまな記念行事などで、多くの客人を当館へむけていただいたおかげで、わずか２ヶ月あまりの期間で年間来館者数の３分の１相当にあたる過去最高の来館者数にのぼった。

この展示開催において、学内全体に通じるテーマを扱うことで、これまで以上に学内外からの関心を寄せる声をいただく機会が増えてきた。当館が本学における大学博物館としてより多くの人々に愛されていくためにもこうして大学全体で連携して行う催事の意義は非常に大きいものであることを実感した。今後も工夫していきたいと考えている。

あらためて多くの人々の情熱の結集によって本学が現在にいたり、そして今もなお進行形のなかにあり、その姿を私たちが多くの先輩や仲間とともに創り上げ続けている状況を再認識することとなり、キャンパスの風景のなかで樹木一本をみつめる意識も自身の内で変化していった。

（原田）

10月｜11月

■ 2014秋季連続講演

「数寄空間の成立と展開について」

第一回「“市中の山居”からのメッセージ」

講師：尼﨑博正 氏
（日本庭園史・作庭・ランドスケープ／京都造形芸術大学教授）

パネリスト：白幡洋三郎
（庭園文化史／中部大学特任教授、元国際日本文化研究センター教授）

第二回「茶室・数寄屋像の多様性について ―近世から近代へ」

講師：矢ヶ崎善太郎 氏
（日本建築史・伝統建築生産学／京都工芸繊維大学准教授）

総参加者数：123名

秋季連続講演チラシ

■ 連続講演１｜2014年10月16日（木）15：30～｜中部大学リサーチセンター 大会議室

講師：尼﨑博正 氏（日本庭園史・作庭・ランドスケープ／京都造形芸術大学教授）
パネリスト：白幡洋三郎（庭園文化史／中部大学特任教授、元国際日本文化研究センター教授）
司会：下川辰彦（日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員）

第一回「“市中の山居”からのメッセージ」

今年は、本学の大学50周年記念の年にあたり、秋季企画展示を「春日井キャンパスの50年」と題してキャンパス内の建物と緑化計画の変遷をパネルにまとめ展示する試みをするなかで、この期間に関連したテーマとして、日本庭園における景観についての連続講演を企画した。

第一回目の講演でお招きした尼﨑氏は、自らも庭園設計を行う傍ら、古庭園の修復指導から近代の日本庭園の作庭師の小川治兵衛に関する大著をまとめられてきたことからわかるように、作り手と研究者という両者の観点を複合的にあわせもつことで、非常に層の厚い御研究をすすめられてきている。

本講演においても、茶庭における露地のあり方について、都市空間の成り立ちから都市における茶庭の求められてきた精神性を解説していただいた。また、講演の後半には、同氏と親交の厚い庭園文化史研究の白幡氏をパネリストに加え、さらに近現代の日本人である私たちの理想とする空間作りについて考えさせられる事例をあげながら、専門の眼から日常をどのように切り取り美しい景観を見出していったらよいのかという考察に両先生が見事に導いてくださった。

尼﨑氏の講演と両先生の対話をぜひ聴きたいという庭園造園関係者の方々も多く来場いただき、会場はほぼ満席の状態であっただけでなく、講演のお話によって、日本人の培ってきた美的な感性の歴史を、庭園という特有の空間を通じて、私たちも過去から現代、そして未来へ継承する一員であるというような使命を感じ取ったように思われ、心温まる思いがした。（原田）

講演の様子

■ 連続講演２｜2014年11月26日(水) 15：30～｜中部大学リサーチセンター　大会議室

講師：矢ヶ崎善太郎 氏（日本建築史・伝統建築生産学／京都工芸繊維大学准教授）
司会：下川辰彦（日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員）

第二回「茶室・数寄屋像の多様性について―近世から近代へ」

秋の連続講演第二回目の講演にお招きした矢ヶ崎氏は、主に茶室建築と庭園との関係性を研究テーマとされている気鋭の研究者である。ご講演のお話から、庭園建築を理解するためには、当然のことながら、作庭家や茶道家、さらに建築家や各職人の方々の英知が結集され初めて完成されるものであることをあらためて認識させられた。

かつては、施主が貴族、武家、寺社仏閣など多様であることもなおさらに建築の構造の意義が奥深いものとなる。 こうした多様な人々の関わりを総合的に調査研究されている矢ヶ崎氏の観点は、建築の特徴に込められた一つ一つの思いを丹念に紐解く解説の随所に、制作に関わった全ての作り手への敬意を持たれている様子がうかがうことができた。

やはりその熱意は、作り手の息吹を傍で見聞きされているからこそ、苦楽の実状を知り、そしてまたその「かたち」に込められた「時代を超える祈り」を言葉にして伝達する使命を感じていらっしゃるからかもしれないとも思われた。

今回の講演では、近隣の茶道家の関係者として女性の参加者も数多く、茶道の聖域といえる茶室の成立と、それらを各時代の様々な分野の人々によって守り改訂されながら継承されてきた歴史に対する講演内容に感銘を受けたという声が多く寄せられた。また時間の都合で煎茶に関する箇所が省略されたことを受けて、次回の開催を希望する声も同じく多く、関心の高さがうかがえた。

講演の最後には、司会により、講演と同時期に当館で開催中の秋季企画展示「春日井キャンパスの50年」に触れ、本学キャンパスにおける書院建築「洞雲亭」「工法庵」「爛柯軒」と庭園一帯の紹介とともに、今後私たちがこの建物と緑を愛し、憩いの場として過ごすことで、未来へ継承していくという行動へつなげていきたいという言葉が添えられ、一同がこれまでの50年への感謝の思いと、またこれからの日々への思いを新たにした。

（原田）

講演の様子

11月

■部会開催

平成26年度 全国大学博物館学講座協議会 西日本部会の開催

‖期間‖2014年11月15日（土）～11月16日（日）
‖会場‖中部大学22号館　2215教室、民族資料博物館

参加校：42校

平成26年11月15日、16日の両日、中部大学にて、全国大学博物館学講座協議会・西日本部会（以下、全博協と呼ぶ）が開催された。本会議場としては、22号館の2215号教室が使用されたが、民族資料博物館も見学会場となった。

全博協は博物館学講座を置く大学の担当教職員から構成されており、博物館学研究及び博物館の振興を目的とする組織。博物館法や博物館の行財政の改善策などを提言している。主な活動は大会の開催、年1回の東日本・西日本の各部会の開催、また文部科学省や日本博物館協会への提言、研究者への研究助成などの事業をしている。

今回の中部大学での会には、愛知県から西の大学42校、参加者56名、全博協会長、東日本部会長、日本博物館協会、地元博物館関係者、本学関係者等、約25名、総勢80名ほどの参加者を得ることができた。

全体質疑

会議では、西日本部会長である花園大学の芳井副学長、民族資料博物和崎館長からの挨拶があり、その後、会議、講演、質疑応答など有意義な討論がおこなわれ、会議終了後、民族資料博物館の見学を行った。

次の日（16日）には地元愛知県の博物館を廻る見学研修会を行い、無事、西日本部会を閉会することができた。大学や博物館の研究者間のネットワーク形成が重要な課題である今日の大学の博物館学において、今回の開催は研究や教育を向上する一助になったのではないかと推察される。

また、参加者からは民族資料博物館への協力や支援の意見が多数よせられ、今後の博物館運営を充実・発展させるうえでも有意義な会となった。開催にあたり、ご協力いただいた、西日本部会事務局や本学の関係者の方々、そして手伝いの学生諸君に深く感謝します。　（宇治谷）

研修会の様子

見学会場

11月

■ 整理資料経過報告（プレス公開）

近藤英明氏のコレクション（一部公開）について

除幕式・プレス紹介　2014年11月28日（金）―関係者約15名

世界70か国・地域を訪れて、民族資料を収集した故近藤英明氏のコレクション約1,500点が、昨年（2014年）11月に民族資料博物館にご遺族から寄贈されました。コレクションの一部は展示場のシルクロード室で一般公開しています。

近藤氏は1968年あま市に誕生し、高校卒業後トヨタの関連会社に勤務のかたわら世界各地を訪れました。26歳のとき旅先のタイで出会った民族衣装の素晴らしさに魅せられたのが民族資料収集のきっかけであったようです。2011年、胃がんにより惜しくも43歳の若さで亡くなるまで、中国、東南アジア、ヨーロッパ、ロシア、中南米など世界各地を股にかけて広範な収集活動をおこないました。また研究成果を論文にまとめるとともに、各地で展示会、講演会をするなど精力的に活躍しました。

収集資料の中でも特に中国や西アジア地域の少数民族の衣装や中国の纏足（てんそく）用布靴は今後収集することが困難である貴重な資料です。現在一部の資料は展示していますが、多くは収蔵庫にて整理及びデータ作成中です。

これらの資料や情報は学内の研究者、学生、市民に広く公開することで、多くの人々に感動を与え、研究の深まりとともに、大学と地域活性化の礎になることが期待されます。（宇治谷・佐藤）

展示風景

2月

■ 研究成果発表展示

「日本人が残した写真絵葉書に見る 100年前の東南アジア 付アフリカ」展

‖ 期間 ‖ 2015年2月6日（金）～2月27日（金）
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館　多目的室
‖ 企画 ‖ 青木澄夫（国際関係学部教授）

入場者数：276名

展示風景

2015年2月6日から27日まで、中部大学民族資料博物館で「日本人が残した写真絵葉書に見る100年前の東南アジア　付アフリカ」展が開催された。

この展示会は、私が日本学術振興会科学研究費（基盤C）（2012～2014）及び中部大学特別研究費A（2012～2013）の支援を受けた「南洋における日本人社会の形成と変遷　在日外国人との共生の一助として」研究の成果公表の一部であり、開催はJSPS科研費24617019の助成によるものだ。

近年経済成長が著しい東南アジア諸国では、古写真や古絵葉書への関心が高まり、公文書館や図書館、博物館が入手に努め、絵葉書を拡大した写真の展示や、絵葉書集の発行、絵葉書の複製販売などが行われている。

その中には日本人が関与した絵葉書も相当数含まれているが、写真の撮影者や絵葉書の発行人の情報について説明が付されることは少ない。

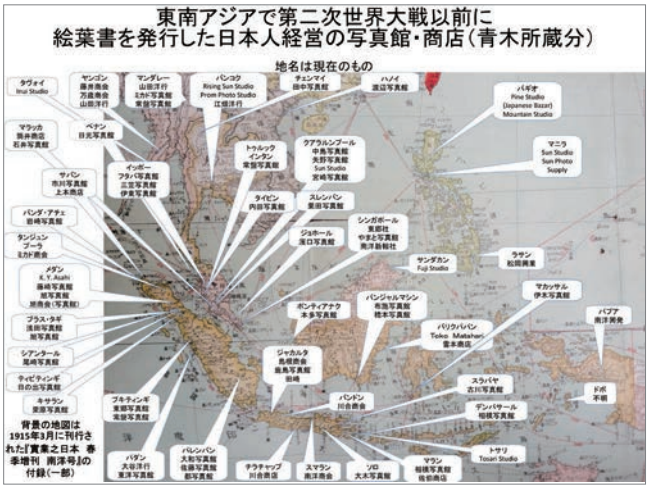
カメラや電話がまだ普及していない時代、簡便な通信手段、手軽な土産として重宝だった写真絵葉書は、各地の写真館や商店が競って製作・販売した。

日本人も、1904年の消印がある絵葉書を作成したミャンマーの藤井商会をはじめ、100年以上も前から70店以上の日本人写真館や商店が販売している。しかし、絵葉書の購入者のほとんどが欧米人だったことから、販売国の東南アジア諸国ですら残存するものは少なく、日本でもその存在が知られることはほとんどなかった。

日本と同様に、風俗や文化、自然や建造物など、東南アジア諸国でもすでに失われたものは多い。また、日本人の東南アジアへの関与についても、一般日本市民の活動を物語る史資料は極めて少ない。

そうした意味でも、歴史の一コマを画像に残した、「無名」の日本人たちの足跡は大きく、日本と東南アジア諸国との交流史の観点からも評価に値する。本展では、東南アジアの日本人写真師など45名とアフリカの日本人写真師2名が作成した絵葉書など180枚を56枚のパネルで紹介し、あわせてカタログを作成し研究機関等に配布した。

（青木）



地域グループの利用について

～MOVEデッサン会、春日井さくらライオンズクラブ

MOVEデッサン会のスケッチ風景

春日井さくらライオンズクラブ見学風景

10月にはMOVEデッサングループの皆様が、当館の常設展示を見学しながら目に付いた作品資料を館内で観察しながらスケッチをして時間を過ごされました。

また2月には、春日井さくらライオンズクラブの皆様が、例会後の施設見学先の一つとして、当館を見学され、展示資料の民族楽器や民族衣装に触れながらひとときを過ごされました。日頃の、授業利用や高校生の見学のほかに、近年では、少しずつですが、近隣地域の方々がグループで利用いただく機会が増えてまいりました。　開館以後、当館は、講演や展示を企画しながら、東海圏の大学や高校のほかに、近隣の美術博物館をはじめとした教育施設や交流のある大学等へ、手作りではありますが、チラシやポスターをお送りしています。

また、毎年継続して開講している一般対象の絵画の実技講座（特別講座）では、昨年に開講三周年を迎え記念展示を春日井市役所内の市民サロンをお借りして、外部において初めて作品をお披露目しました。こうした毎年の積み重ねが、人から人への声のつながりの御支援を受けて、大学博物館を地域のなかに徐々に導いていただいていると実感し、感謝の念が絶えません。

2014年は開学50周年という記念の年でした。学園長をはじめ教職員が一体となって、地域の皆様への感謝をかたちにしたいと一心に願い、秋季企画展示も成功させることがかないました。

本学のキャンパスは、開学当初から建築群との関係性を総合的に計画立てて、造られてきました。学生から一般の方々まで、あらゆる学びのエネルギーを受け止め育む寛容さと、そして訪れる全ての皆様に、癒しのひとときを御提供できるような静謐さをあわせ持つ環境としてできつつあります。

この誇らしいキャンパスのなかに建っている建築の一つとして、民族資料博物館は、皆様をお待ちしています。　（原田）

2015　上半期（春季夏季）行事案内

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

◇春季展示会

自然布―悠久の技に学ぶ

平成27年5月21日（木）～7月7日（火）　場所：民族資料博物館　多目的室

◇春季連続講演（連続2回）

自然布―悠久の技に学ぶ

第1回講演：平成27年6月7日（日）　「藤織りと裂き織り」
井之本　泰 氏（丹後藤織り保存会会長）

第2回講演：平成27年7月7日（火）　「エジプトの亜麻―メトロポリタン美術館の所蔵品などから」
梶谷宣子 氏（メトロポリタン美術館名誉館員）

◇夏季常設コレクション展示

「美の起源―五大陸の絵具」

会期：平成27年7月10日（金）～8月9日（日）　場所：民族資料博物館　多目的室